

鍛冶屋の娘

井口昭久

私が小学校に入学したのは昭和24年である。同級生に幸ちゃんがいた。

小学校の北側にはちよろちよろと湧き出る水を集めた小川があった。小川は天竜川に注いでいた。小学校から眺めると、中央アルプスの峰々が連なり雪を冠^{かむ}っていた。その裾^{すそ}に天竜川の堤防が見えた。小学校は野の底に小さく佇^{たなず}んでいた。タンポポが似合っていた。

小学校は一学年に一組しかなかったが児童は多かった。戦時中の「産めよ増やせよ」の政策によって、その頃の日本は子供で溢^{あふ}れていた。私の入学した学級も50人は超えていた。その頃は保育園や幼稚園といった幼児教育



は鍛冶屋で定期的に交換しなければならなかった。読者の中には「村の鍛冶屋」という小学唱歌を覚えている人たちがいるに違いない。歌詞は次の通りである。

暫時（しばし）も止まずに槌打つ響／飛び散る火の花／はしる湯玉／ふるごの風さへ／息をもつがず／仕事に精出す村の鍛冶屋
ウイキペディアによると、この歌は「長く全国の小学校で愛唱されてきたが昭和30年代頃から農林業が機械化するにつれ野道具の需要が激減し、野鍛冶は成り立たなくなつて次第に各地の農村から消えていった。児童には想像が難しくなり昭和60年にはすべての教科書から完全に消滅した」と書いてある。
幸ちゃんはいつも窓際の席に座り外を眺めていた。

鍛冶屋に客が現れるのを眺めていたのだ。農機具の修理や蹄鉄の交換の客は多くはなかった。一日中客がない日もあった。

そこで幸ちゃんの父親は天竜の河原で土方

を担う機関がなかったたので、子供たちには小学校の生活が初めての集団生活であった。机に向かつて先生のお話を聞くという習慣がなかった。授業が始まってから終わるまで家に帰ってはいけないことも知らない子供たちであった。教室は鶏小屋のようなものだった。先生は手に負えなかったに違いない。学校の正門の前に鍛冶屋^{かじ}があった。幸ちゃんは鍛冶屋の娘であった。

鍛冶屋は農機具の修理や馬の蹄鉄^{ていてつ}を交換する場所であった。その当時は馬が農作業に使われていた。農作業は馬の蹄（ひづめ）を損傷するので、馬は足に蹄鉄を嵌^はめていた。蹄鉄

の仕事をしていた。天竜川は雨期になると必ず氾濫^{はんらん}したので、河原にはいつでも仕事があった。店に客が来た時だけ戻つて鍛冶屋の仕事をするのだった。

教室から外を眺めていた幸ちゃんは、馬を連れただお客が現れるとそつと教室を抜け出していった。そして鍛冶屋の入り口に横たわっていた幟^{のぼり}を立てた。それが合図となつて父親が土方仕事を中断して帰ってきた。

急いで帰つた父親は、ふいごを吹いて火を起こした。

蹄鉄を打ち出すと、馬の蹄の焼かれる匂^{にお}いに小学校が包まれるのだった。

（愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授）

